

審査員賞

一般文章(手紙・作文)部門

愛知県安城市

古賀 裕一

「神の声」

誰の言葉なのか、誰が書いたのか判らないが、リハビリ室の受付に置いてある色紙の言葉には見入ってしまう。そして自然と微笑む。そこにはこう書いてあった。

「生きてるだけで丸もうけ」

その事故は突然私に降りかかってきた。趣味のバイクで走り慣れた道のいつもの交差点で信号停止。青信号に替わったのを確認して交差点に進入したその時、信号無視のダンブカーが右から突っ込んできた。逃げるのができなかった。バイクごと跳ね飛ばされて宙を舞い、路面に叩きつけられる。幸い頭、首は大丈夫だったが肩、腕、足は複雑骨折。緊急搬送された病院で九時間を超える手術を受け、ピンやボルトを九本も埋め込まれた。そして痛くて辛いリハビリが始まった。

体育会系の私は身体を動かすことが好きでこの歳まで色々なスポーツをやってきたが、大病、入院の経験はない。丈夫な身体に産んでくれた両親に感謝していた。そんな私が重傷緊急入院でしかも車椅子である。心底落ち込んだ。医師の指示でリハビリを始めた時には腕が上がらず万歳のポーズもできない。平行棒にすがって歩くのもできない。ベッドに寝たっきりの入院生活なのであつという間に筋肉は落ちていた。絶望的な気分だった。医師は言う。痛くてもちゃんと動かす練習をしないとずっと動かなくなりますよ、と。そんな時に見つけたのがあの色紙。私の弱気を叱る神の声だと思った。世の中にはもっと不便な状態で一所懸命生きている人は沢山居る。このまま落ち込んでいても埒があかない。あの不運な事故で死ななかつただけでももうけなのだから。死ぬ気でやろうと決心をした。あれから三年が過ぎた。身体の中には未だピンとボルトは残っている。しかし痛さと辛さを乗り越えたりハビリののおかげで万歳もできるし、走ることもできるようになった。あの時偶然見つけたあの言葉が背中を押してくれたのだ。やはり神の声だった。